

医療・介護資源のない地域 利用者を尊重したケアとリハビリを



介護老人保健施設リハビリタウンくじ
(岩手県久慈市)

完全個室のユニットケア 当初から取り入れる

岩手県の北東部の太平洋沿岸に位置する久慈市。海女のまちとして有名だが、いまやその名は全国区になった。そのきっかけとなったのが、同市を舞台としたNHKの朝の連続テレビ小説「あまちゃん」である。放送終了から1年近くたつというのに、いまでもロケ地めぐりの観光客が訪れるという。

医療法人健全会（理事長＝竹下敬敏氏）が運営する「リハビリタウンくじ」（入所定員114名、うち認知症専門棟40名、通所定員45名、平均要介護度3.1）は、JRと三陸鉄道の久慈



東北の初夏らしいひんやりとしたなか、玄関前にて元気にポーズ！



六本木施設長

駅から徒歩で15分程度の場所にある。平成23年の東日本大震災では、被災し停電で苦勞したが、津波の襲来や建物の倒壊は免れた。

「リハビリタウン」という名前のおと、医療・介護資源が十分になかったため「リハビリのできる施設がほしい」という地域の声に応えるかたちで平成17年に開設した。開設以来継続して訪問リハビリも行っている。

同施設の基本理念は「利用者様の尊厳を尊重し、安心安全で質の高いサービス。まさにこれを愚直なまでにやり遂げている。

「開設当初から完全個室のユニットケアを行っています」と話すのは、立ち上げからかわる大川良三事務長。平成18年の介護報酬改



大川事務長



晴山看護師長



ユニットでは、スタッフが利用者一人ひとりをよく理解し、信頼関係が成り立っている

定でユニット型個室が介護報酬上評価されたことは周知のとおりだが、利用者の尊厳を守ること、さらに居心地のよさを追求すると、従来型の多床室ではそれがかなわないという思いがあったので、平成18年の改定以前である、平成17年の開設時からユニットケアを取り入れ

ている。1ユニット10名で、現在は、全11ユニットのうち2ユニットは医療依存度の高い利用者のユニットとしている。「開設当初はユニットケアを経験している職員がおらず、どうしても集団ケアになってしまふ。苦勞しました」と大川氏は振り返る。外部の研修を受けることで軌道に乗りに出したそう。

在宅復帰は難しくても 在宅での生活に近い雰囲気

看護師の晴山清子看護師長も開設にかかわった一人。晴山氏は、「リハビリは、開設当初から担当制をとっています。ご利用者ごとに目標を設定し、特に生活リハビリについては、ケアスタッフが担当のリハビリ職と連携して、トイレの訓練や着衣の訓練なども行います」と話す。

高齢になるほど状態をよくすることは難しくなるが、悪くすることがあつてはならない。そのため利用者の状態像を細かく把握できる有益なケアマネジメントツール「R4システム」は、できたと同時にすぐに導入した。

ケアもリハビリも利用者のことをよく知り、その人その人に合った方法で行う。そのためには人手が必要であり、経営的な余裕があるわけではないが、利用者一人ひとりを尊重する施設側の努力がうかがえる。

在宅復帰率については、「今年4月に施設長が変わったので、在宅復帰をめざそうと進めているが、なかなかうまくいかない」と大川氏。それには、久慈市の地域性が大きく影響しているようだ。

施設長の六本木義光医師によると、「動きがないんです。だから、一家の動き手は出稼ぎに出なくてはならず、本来家にいるべき人が

揃っていない世帯が多いと思います。それに、若い人は都会に出て戻って戻ってこない。さらには、「岩手県は医師不足で、久慈市を含む沿岸部は特に医師が少ない。だから、在宅医療まで対応する余裕がなく、取り組んでいるところはほとんどありません」と六本木氏。

つまり、在宅に戻りたい、戻ってあげたいと願ったところで、そもそも受け皿がないのだ。だからこそ、ここにいるあいだは自宅にいるような心地よい生活を送ってほしいというのが同施設の思いだ。

「在宅での生活に近い雰囲気を出すことで、地域から求められている役割のひとつを果たすことができると思います」と六本木氏が話しており、個室でユニットケアというだけでなく、在宅にいるときと近いリズムで生活ができるようなさまざまな工夫を行っている。

リハビリをするタイミングにしても、利用者によって生活パターンが異なるため、生活の

自宅に近い環境で生活してもらいたい —リハビリタウンくじの現場を支えるスタッフと美学生のご紹介—

●鈴木奈々江さん（介護福祉士）



高校を卒業と同時に高齢者住宅で介護職をしており、4年前にこちらに入職しました。今年からユニツトリーターを任せ、緊張の毎日です。ここに入るまでユニツケアの経験がなかったのが最初は戸惑いましたが、一人ひとりのご利用者と顔なじみの関係になるのが、信頼関係も築きやすいと思います。車で出かけるなどの楽しみのある生活を送っていたという工夫もしています。これからは、在宅療養の支援にも力を入れていきたいです。

●叶 朋洋さん（理学療法士）



盛岡の病院から地元であるこちらに入職して9年目になります。病院とは違い、老健施設は生活の場。生活のなかにいれたいです。だから、一人ひとりの生活リズムに合わせ、生活のじゃまにならないよう配慮してリハビリを入れています。私たちが医療職は、どうしても「これはしちゃだめ」と縛りをしてしまいがちですが、そういう方は生活の場ではいたくない。「ここまでする方がいいですよ」という方法をすすよう心がけています。

●久慈東高校 介護福祉系3年 荻沢友哉さん



同級生2人と実習に来ています。祖母が介護施設で調理の仕事をしており、子どものときに職場に行く機会があったので、介護職をせざしたいと思うようになりました。実習6日目ですが、スタッフの皆さんから優しく教えてもらっています。老健施設の雰囲気はわかり、明るいところだと思います。高校卒業後は、介護福祉士をめざしてがんばります。



90歳になる澤里さんの療養室は趣味のパッチワーク作品で溢れている。作品は施設内に飾られ、華を添えている

塾」。通称をつけた六本木氏は、附年の「あまちゃん」ブームで「北三陸」という言葉が頻繁にテレビで流れたので」と笑うが、取り組みはいたって地道でまじめである。

同施設を事務局として、久慈医師会、久慈歯科医師会、久慈薬剤師会、岩手県看護協会、市内の地域包括支援センター、医療機関、介護施設などが参加し、いまは勉強会を開くなどの活動を行っている。今年中にNPO法人化もめざしているという。

老健施設から在宅復帰し、在宅での生活を他の地域資源が支え、また不安になったら、老健施設に再入所する。そんなサイクルで中間施設としての役割を果たすことは、いまは難しい。「当施設に再入所できないと行く先がないので、だから、入ったら出ることなく最後までいたい、というようになっている」と六本木氏が指摘する。

時間はかかるかもしれないが、地域連携が果たせるようになれば、中間施設としての役割を發揮できるようになるだろうと期待している。

高まる医療的ニーズ 包括診療の見直しを

同施設の職員の平均年齢は39.8歳。地元の岩手県立久慈東高校の卒業生を毎年1名迎え入れている。

「高校を出たばかりの職員が、村世介助などをするのをみていくと、もっと処遇をよくしてあげたいと思うのですが、経営的に難しい。消

費税率が上がりが、基本報酬が引き上げられました。国には、さとはいえませんが、国には、さとなる処遇改善を望みます」（大川氏）

施設としては、今年度から新人職員への教育にこれまでに力を入れ、さらに経験年数によって全老健で開催している研修を有効に選択できるように計画中ということだ。

東北3県でいち早くスタートした「介護プロフェッショナルキャリア段位制度」にも参加し、アセッサーを1名養成した。いま2名の職員がレベル認定をとるべく評価を受けているところだという。

利用者や職員によいと思うことは積極的に取り入れる同施設の姿勢は、医療行為にも通じている。利用者の年齢も上がり、「医療的なニーズはどうしても高くなる」と晴山氏。看取りも年に4〜5例ある。

所定疾患以外には包括になるとわかっていても、医療依存度の高い利用者にはしっかり医療提供し、経済的理由で薬剤を減らすことはしない。

しかし、医療費や薬剤費が経営を圧迫しているのは確かである。

包括診療の見直しを求めるとともに、「こちらとしては必要最低限の薬でいのに、医療のほうは出来高でやっている。薬がどんどん増える方向にあるように思う。薬を減らしても大丈夫な方にそのように説明しても、納得してくれなかったり、薬はあるだけいいと思っている方もいます。国として国民に薬に対する理解を深める取り組みをしてほしい」と六本木氏は要望する。

現行の制度や地域性を嘆いて終わるのではなく、地域に求められる、地域に根ざした施設であるために、多少の犠牲を払っても信念を曲げずに突き進む。その姿勢に、介護現場を支える職員一人ひとりの熱意と利用者に対する気持を感じた。（取材：社会保険研究所）

協力病院の岩手県立久慈病院などから患者の紹介もあるが、受け入れられないのが現状だ。

「老健施設は中間施設なので、流れのある施設を目的としています。現実にはご利用者の動きはほとんどなく、こう着状態になってしまっている。待機者もいます。一定の流れをつくらなくてはなりません」とは六本木氏の言葉だが、それは施設の課題であり、地域の課題でもある。

六本木氏が、「2025年問題といいますが、それは都市部の話で、久慈地域ですべてに高齢者がピークに近づいています。国は2025年問題に向けて動いていますが、それに従っていけばいいというわけではありません。地域で考え、対応する必要があります」と話すとおり、特にここには医療・介護資源がないという地域特性がある。

この課題を解決すべく立ち上がったのが、同法人の理事長であり、久慈医師会会長でもある竹下氏である。

地域における医療・介護・福祉の顔の見える関係をめざし、昨年、「久慈地域医療・介護・福祉連携協議会」を設立した。通称、「北三陸

じゃまにならない時間に行うようになっている。

入浴は個室で、洋服の着脱などそれぞれの利用者でできることは自分でやってもらうのは当然だが、「お風呂に入るタイミングも、入浴にかけられる時間も、どんな入浴剤を使うかも、すべてご利用者の自由です」と晴山氏。

在宅での生活に近づけるため、どんな場面でも手を抜かず、全職種が一人ひとりの利用者に向き合っている様子がひしひしと伝わってくる。

ただし、言うは易く行うは難し、である。ユニツケアは、1ユニツ10名の利用者を数名の職員で介護しており、従来型と比べれば人手がかかると、時には1人の職員が10名のご利用者をみることもあり、その場の状況に応じてやるべきことの優先順位を考えなければならぬなど、個々の職員の能力が求められます」（晴山氏）。

医療・介護・福祉の連携協議会 「顔の見える関係を」

前述のとおり、なかなか在宅復帰が進まないため、利用者の平均在居日数が長くなりがちで空床があまり出ない。そのため、すぐ隣にある